愛犬

木坂 広一

ある偶然の出来事を経て、井口聖子と再会するはめになった。と言って彼女はロマンの対象というわけではなく、その真逆と言っていい。それにしても聖子とは何かと悪縁がある。もう大分以前に住吉のバス停に立っていたら、六十年配の女に声をかけられた。

「失礼ですが、あなたは江東区の図書館にお勤めの方ですか」

とっさのことに直樹は慌てて手を振って答えた。

「いいえ、違います」

「あら、そうですか、ごめんなさい」

女は恐れ入ったように引き下がり、二分ほどしてバスが来たので、前後して乗り込んだ。土曜日の午後で、二時過ぎまで会社に残っていた。後ろの席から改めて前の方を見ると、女は知的で上品な雰囲気を感じさせた。何故あんなことを聞いたのだろう、何か訳でもあるのか。考えてみたら、彼女の質問は必ずしも見当違いというわけではない。直樹は二十代の頃、区立図書館の司書をしていたが、勤務先は江東区ではない。その前は民間の会社に勤めていた。推測を巡らしているうちにハッとして、よもや、彼女は瀬田みどりさんではないだろうか…一目見た時も似ていないことはないし、年恰好はこんなものだろう。けれどベージュのコートを着た後姿は違うような気がする。すっきりした答が出ないままバスは門前仲町についた。直樹が降りる時、彼女は座っていたからまた気になって確かめたりした。

直樹の住まいは駅前停留所から十分そこそこの所にあり、帰宅するとさっきの出来事に思いを馳せた。四谷の会社に勤めていた頃から長い年月が経っている。瀬田みどりは当時から未婚で、見るからにそんな雰囲気があって多分今も独りだろう。家族と一緒に過ごしているようには見えない。しかしどうあれ、もっと丁寧な受け答えをすればよかった。あれでは拒否しているようなものだ。会社は自動車の部品工場で直樹は現場で働いている。

一か月半ほど過ぎて、六月というのに例年にない暑

さが続いていた。直樹は会社の帰り、食堂で腹ごしらえをしてから帰宅した。集合ポストを見たら、女名の封筒が入っていて、差出人の名前を見た途端、

「何だい、こいつ」

軽蔑とも嫌悪感ともつかぬ気分を覚えた。四谷の印刷会社に勤めていた頃の同僚で、まるで醜女の亡霊が出て来たような気がした。あれから年数を数えると十七年が経っているが、一体何のつもりだろう。さっそく開封して読んだ。

――突然のお手紙で驚きのことと思います。先日、私と同じ月島に住んでいる瀬田みどりさんが訪ねて来られて、田辺直樹さんのお話が出ました。住吉駅周辺のバス停であなたに似た人を見かけ、声をかけたら人違いということでした。それがきっかけで当時の話題で盛り上がりました。あなたと親しかった岡井昌代さんは子供が二人いて、大きくなったとか、田辺さんは結婚しているのだろうか、でも家庭の臭いがしなかったから、独身ではないかとか、色々と俎上に乗りました。

みどりさんはフリーの校正の仕事をしながら、俳句を作っています。私は新橋の会社に勤めていて、それなりに充実しています。みどりさんとはお互いの家を行き来したり、喫茶店でお茶をしたりしています。田辺さんが懐かしくなって、一筆したためました。田辺さんの住所や電話番号はあなたと親しかった吉村久夫さんからお聞きしました。

井口聖子

想像した通りみどりさんだったので、こんな嬉しいことはなかった。だが、こともあろうに井口聖子が手紙を書いてよこすなんて考えてもみなかった。直樹は天敵のような聖子が嫌いだったし、向こうも直樹を快く思っていないはずだ。しかしみどりとは連絡を取りたかったから、ただちに返事を書いて、あの時の独り者風の男は、自分に間違いないと簡単に記した。四、五日したらみどりから電話がかかって来たので直樹は恐縮して、真っ先にあの時の自分の振る舞いを詫びた。

「先日は気がつかなくて、ごめんなさい」

「いいえ。やっぱり田辺さんだったのね」

「後から、もしかしたら…って僕も考えました」

「あの日は芭蕉記念館に行ってきた帰りなの」

「俳句を作っているそうですね」

「そうなの」

みどりは直樹の姿を見た時、別人かもしれないと不

安に思いながら、近づいて行ったのだが、上がっていて、即座に名前が浮かんで来なかった。
「もう、何でもいいやと、きっかけをつかむつもりで、あんな風にお尋ねしたの。図書館にお勤めだとか、聞いていたものだから」
「図書館にいたのは、僕も忘れていました」
「今は違うところなの」
「働いているところは工場です。いくつかの仕事を渡り歩いて、やっと落ち着きました」
「結婚なさっているのでしょう」
「いや、独身です」
「そうなの。私も人のことは言えないけど」
「三十八にもなると手遅れです」
「聖子ちゃんもまだなの」
「あの女は不美人だから、男は相手にしませんよ」
「でも、お化粧すればまあまあよ」
「化粧したって駄目ですよ。性格もよくないし」
「あなた、よほど彼女が嫌いなのね」
「何かと人を小馬鹿にするような女は、好きになれません」
「そうでもないわ」
「僕には特に舐めてかかっていました。あれは女じゃなくて化け物ですよ」
　直樹はあんなに嫌悪を抱いた女はいなかった。ただ当時は会社に好きな異性がいたので救われた。岡井昌代は二十一の直樹よりも二歳年上で、総務課の事務員をしていて、タイプといってよく、美形の顔立ちをしており、賢くて利口な性格だった。同僚に見つからないように内緒に付き合っていた。定時制に通っていた聖子は感づいていて、「あんた達は仲がいいわね」からかった。
「普通だよ」
「そうかなあ。できているんじゃないの」
「人のことはいいから、自分もカレシをつくれよ」
　顔をジロジロ見てやった。色が黒くてそばかすだらけのドングリまなこ、ずんぐりした小柄な体つきをしていている。しかもすれていて、いいところが一つもない。ブスもブス、大ブスだった。女として何のためにこの世に生まれて来たのかと言いたくなる。年上の直樹をくみしやすいとみているのか、ちょっかいを出したり、揶揄したり、嫌味を言ったりした。
「田辺君って、性格は悪くないけど、社会性がないわね」
　君付けで呼び生意気な口の聞き方をした。

「そういうお前はどうなんだい。美的な価値はあるのか」
「私はこれでも胸の形がいいのよ」
「そうは見えないぞ」
「そのほかにも美点はあるわ。人には見えないだけで」
「あそこか。じゃあ、見せてみろよ」
「見せるわけないよ、失礼だね」
聖子は負けていない。しぶとい性格で、どことなくパワーを秘めている。だが岡井昌代のような容姿や瀬田みどりのような品性はまるでない。みどりは二階の校正室で仕事をしていた。昼休みになると、いつも古い雑誌を読んでいて、それがどんな表紙か見たことがないし、むろん中身を何か聞いたことがない。直樹は何となく推理小説のような気がしていた。彼女の存在が謎めいているからそう思ったのかもしれない。有名な女子大の英文科出身だけに知識が豊富で、年齢相応に魅力があった。
あの頃は平成の中頃で、どうということもない時代だったが、個人的には昌代と付き合い、また聖子というバカ女に出くわし、不愉快な記憶を刻みつけられたことが印象に残っている。ある日、退社時間を過ぎてから特注のパンフレットを刷るように指示された。アルバイトの社員は主任と一緒に配達に出かけた。大きなテーブルで聖子と二人で製品を数えたり整えたりした。
「あんたどんな女性に興味あるの」
「太目の中年女」
「へえ、変っているね、どうして」
「初体験がそういう女だったから」
「あれはよかったの」
「それ以上、聞くなよ」
「私も早く経験したいわ」
「無理だね。お前とやりたい男なんて、いないだろう」
「絶対に見つけるわ」
そう言いながら直樹の尻をつねったり、掌を這わせたり、フトモモの方に手を延ばしたりした。十七歳にしてこんなことをするから呆れた女だ。
「俺は何をされてもお前じゃ感じないぞ」
「そのうち感じるよ。ほらほら、固くなった」
「バカ。男は柱に抱きついても立つんだ」
「わあ、凄い」聖子が感心したような声を立てた。そこへ主任とアルバイト社員が戻って来た。
「けりがついたら帰ってもいいぞ」
主任が言った。後片付けをしながら事務所から出て

来た岡井昌代に、
「もうすぐ終わるから、待っていてよ」
直樹が声をかけた。一緒に帰る約束をしていた。
聖子がじろっと見た。着替えて会社を出ようとすると、
「私も一緒に帰る」
聖子が可愛げのない幼児的な声を立てた。
「お前は一人で帰れよ」直樹が言った。
「いやだ。私も一緒に行く」
「しようがないなあ」
「いいわよ、途中までなら」
昌代が助太刀をした。六時半過ぎに会社を出て、結局聖子は最後までついて来たので、三人で帰ることになった。ＪＲ四ツ谷駅から電車に乗り、京王線の幡ヶ谷駅で降りて途中のコンビニに立ち寄って飲物のほかに幕の内弁当とおつまみを買った。玄関前に紫木蓮が植わったアパートは粗末な一Ｋで、ゴタゴタと物が置いてあり、どうにか三人が座れて、ビールとジュースで乾杯した。昌代は終始直樹に寄りそうようにしていて、聖子がいても遠慮することはなかった。
「昌代さんは演劇をやっていたんだってね」聖子が尋ねた。
「パッとしないけど、舞台に出ていたの」と昌代。
「格好よさそうね。綺麗だから主役でしょう」
「下手くそだったから、準主役の次くらいね」
「何故、お芝居なの」
「特に理由はないけど、舞台に出て見たかったの」
「何か主張するわけね」
「そうね。別の自分になって見たかったのかな」
「私もやってみたいわ」
「聖子に似合う役はないよ」
「田辺君、余計なことを言わないでよ」聖子はムッとした。直樹はこんな話をしながら苛々していた。このところ禁欲しており、昌代を思いっきり抱いて発散したかったが、聖子がいては何もできない。そこでこう頼んだ。
「聖子、ちょっとだけ外をぶらついて来てくれないか」
「なんで私を除け者にするのよ」
「俺達、二人だけの話があるんだ」
「私がいては邪魔なの」
「うん、子供には毒だから」
聖子はふて腐れたように出て行った。いなくなると直樹は急いで昌代の服を脱がせてベッドに上がった。
「あの子、気の毒ね」

「あんな奴はどうでもいいよ」
二人は真っ裸になって抱き合った。ベッドの近くの壁に貼り付けてある外国の水着姿の女優が「大胆ねえ」と言わぬばかりに笑っている。十数分過ぎた頃、足音がした。あの歩き方は聖子だろう。
「どうする」昌代が聞いた。
「このまま続行だよ」
「大丈夫かしらん」
「平気だよ」
直樹はわざと毛布をめくって、かまわず攻めた。聖子はドアを開けて戻ってくると、猫を抱いていて、壁にもたれて座った。その猫はアパートの周辺をうろついており、よく見かける。聖子は猫を撫でながらこちらに視線を向けて、ギラギラした目で見つめた。昌代は抑えきれずに喘ぎ声を立て、直樹は意識して見せつけてやった。やがて聖子は泣き出しそうな顔つきをして猫をおいて部屋を出て行った。
しばらくして終わった。昌代が衣服をつけ終わると、猫が飛び込んできて戯れるので、
「よし、よし、ごめんね」
昌代が手を伸ばして抱いてやった。
「さぞかし聖子はタンタロス状態だったろうな」
直樹は意地悪そうに言った。
「タンタロスって何？」
「神話に出て来る話でね。神の怒りを買って、果実を前にして、食べさせてもらえず、飢えている奴のことだよ」
「可哀そう」
「あれでいいよ」
時間が遅くなり、昌代を駅まで送って行く。直樹がよかったかと聞くと、昌代は明るい声でよかった、と答えた。
次の日、聖子と顔を合わせると、「ひどいわ」と言って睨みつけた。直樹は、
「お前が勝手に付いて来るから、いけないよ」
聖子のせいにした。昌代は聖子に気を使って何度も謝ったらしい。が、直樹は昨日の虚勢が恥のように襲って来た。それからと言うもの職場の雰囲気がよそよそしくなった。作業場の主任が、
「お前と岡井君のことは聞いたぞ」
非難がましい顔つきをした。総務課の課長も、
「未成年の前では許されない行為だ」と咎めた。上司は二人ともまともじゃないという様子なので直樹は狼狽した。社員達の間でも噂をしているらしく直樹寄り

の同僚もどことなく疎ましげだった。昌代は病気と称して欠勤している。瀬田みどりも「よくないことよ」と非難気味だった。ついには会社全体に排他的な空気が満ちてきた。聖子は被害者ぶって沈んだ振りをし、皆に慰められていい子になっている。

あれから長い年月が過ぎた。直樹は自動車工場に勤めて六年になり、フォークマンとして働いている。一人仕事だから同僚との接触が少なく気楽だった。仲のいいのは似たような年齢の松尾修で、彼は恋人を探している。ちょっと前に、

「直さん、恋人出来たかい」

聞かれたことがあった。直樹はネットの出会い系サイトで見つけているが、今はいない。

「松っちゃんはどうなんだい」

「いや、相変わらずさ。でも何だねえ。この会社は独身者が多いね」

「ここだけの給料じゃ、食えないからね」

「うちのおふくろは、そんなものは何とかなるから、早くしな。とにかく、お前が結婚しないと死ぬに死ねないとね」

松尾は母子家庭で、母は息子に嫁を持たせたがっているが、なかなか見つからないらしい。松尾は美男でも醜い訳でもなく、性格は明るくて人柄もいい。苦労しているせいか、金にこだわりがあり、わざと仕事をみつけて残業をするので、非難する同僚もいた。

「どんな女がいいの」

「普通の女なら文句はないよ」

「それなら、たくさんいる」

「いや、いないよ」

「チャンスは意外なところに転がっているから」

「その意外な出会いに期待しているけどさ」

夏の暑さが衰えだし、と言っても十月に入った頃で、みどりからどこかで会いませんかと携帯にメールが入っていた。句集が出来たから差し上げたいと言うのだ。十日後に新宿で待ち合わせをすることにした。会社はガサツな男連中ばかりで、潤いがないから彼はみどりといい関係を築きあげたいと願っている。その日、新宿のルミネのカフェで待ち合わせた。都会の青々とした空にウロコ雲が浮かんでいていい天気だ。みどりとは一度顔を合わせているから間違えることはないだろう。念のために黒い帽子を被っていると話しておいた。約束の土曜日の午後二時頃、周囲を見回していると、三十代の女が、《黒い帽子の紳士》と小声で指をさし、ニコニコして近づいてきた。

「お久しぶり。井口聖子です」
「何だい、誰かと思ったよ」
「びっくりしたでしょう」
「お化けかと思ったよ」
「お化けはないわ」
聖子はセルフサービスの飲物をテーブルの上に置いてから、自分が来た訳を話した。みどりは具合が悪くなったから、代わりに句集を渡してほしいと頼まれたそうだ。
「私もあなたに会えるのが楽しみだったの」
「そうかなあ」
「本当よ」
「でも、見違えたな」
アイシャドウーは濃くて、口紅も赤々と塗っていて、白粉も映えて顔全体が白っぽく見える。聖子とは言え色気づいたのだろう。思わず年齢を聞いた。
「三十六歳よ」
「そんな年になったのか。女盛りだな。ハハハ…」
「田辺さんも成熟したわね」
聖子は何となく忍び笑いをした。そして忘れないうちに渡しておくわと句集の入った紙袋を差し出した。抜き出してみると、ビル群や夕焼けを描いたイラストの表紙はなかなかいい装丁だ。パラパラめくって拾い読みすると都会の夕暮れの雰囲気が漂ってきた。
「いい感じの句集だね」
「みどりさん、センスあるわよね」
家でゆっくり読むよとバッグに収めた。
「田辺さんはまだ一人だってね」
「そうだよ。前の女とは別れたからな」
「新しいのを見つければいいのに」
「とりあえず、現状のままでいい」
「女にはモテるほうだよね」
「モテるようなモテないような…。聖子はどうなんだい」
「私は急がないの」
前よりはおしゃれになったかもしれない。ジーンズに紅色のトップスという格好は悪くないし、それに化粧映えして見える。
「聖子は俺に怒っているだろう」
「別に。昔のことは関係ないわ」
「ところで、まだバージンか」
「はっきり聞くわね」
「正直に言わなくてもいいよ」
「私は自分流を貫いているわ」

聖子は自分から経歴を話した。定時制からさらに二部の大学に入って卒業した。今は輸入雑貨を扱う会社の庶務課に勤めていて、入社以来転職したことがない。自分と違って、まともなので感心した。直樹は適した仕事が見つからず、転々としてフォークマンの身分だが一応安定している。
「田辺さんは人間関係が苦手でしょう」
「好き嫌いが激しいよ」
「そんな感じがするわ」
仕事以外にこれと言った趣味はなく、生き甲斐というほどのものもない。人生の核心に迫っているわけではなく、停滞と言えば停滞している。
「みどりさんはどうなの」
「軽い脳腫瘍みたい」
「軽いならいいけど」
「大丈夫そうよ」
聖子とは一時間ほどで別れた。あんなに嫌っていたが、嫌悪感は奥の方に引っ込んだのか普通の気持ちで話した。しかし彼女は今まで男と付き合ったこともないだろう。セックスもしていないだろう。そんなふうにしか考えられなかった。彼女は表面的に取り繕っているが、中身はほとんど変っていないような気がした。顔は悪くても、いい育ち方をしているという素直さはなくて前と同じだろう。
聖子という魔女と十七年ぶりに会ったせいか、よく散歩する公園で知らない女と話をした。これもささやかな縁である。ポメラニアンをつれた四十年配の女に話しかけられたのだ。
「先日、殺人未遂があったみたいですが、どの辺ですか」彼女は物珍しげに尋ねた。直樹は池の近くですと答えて案内した。池というほどではなく、子供が水遊びする程度の広さしかない。その近くに老木の椎の木が二本立っていて、今にも倒れそうな感じさえする。
「草が少し燃えていますよ」
「あら、ほんとね」
「その女の人は自殺願望がある人みたいね」女が言う。
「そうみたいですね。人を殺したい奴と知り合って、死のうとしたのですが、失敗したんです」
女は黄土色のワンピースを着ていて、太目の脚が覗いており、直樹はエロチックなものを感じた。
「恋人とかいないのかしらん」女は不思議そうに聞いた。
「死にたいと思っているくらいだから、いないでしょう」

「私も独り者だけど、出会いがないわ」
「自分でよかったら…」
ふと直樹は冗談を言いそうになった。話しながら手の甲がお互いに触れた瞬間があったが、それだけだった。
「ミツル、お腹空いているでしょう」
ミツルというのは犬の名前である。
「お腹がいっぱいになったら、ベッドに這入って休みましょう」
犬はクンクンと鳴きながら女にまとわりついた。畜生め、こんな色っぽい女と一緒に寝るなんて、羨ましいな…。
それから二、三日して聖子からメールが来た。
《みどりさんに伝えたら、とても喜んでいました。私も田辺さんにお目にかかり、お友達になれてよかったです。今後ともよろしく》
友達になったからといって、有難くはないし嬉しくもない。それに友達なんかではない。思うだけなら向こうの自由だろう。直樹はみどりさんに早くよくなるように返事を書いておいた。すると聖子から返信が来て、《先日、ドリップコーヒーを安く手に入れたからお送りします。他意はありませんから気にしないで》
三日後、キリマンジェロが届いたのだが百二十袋もあり呆れて、《こんなに沢山送る奴があるか。ほどほどにしろ》と付け加えておいた。
すぐに返事が来た《あなたには特別の思いがあるの。秘密を見てしまったからよ、例のあれよ》
恐らくからかい半分に書いたのだろう。こんなやりとりをしていると、何か特別な感情が生まれたみたいだが、何もない。松尾に三分の二ほど分けてやった。彼もコーヒー好きだった。秋も深まり寒さも一段と増した。その日の夕方、帰りのバス停の近くで、
「あれッ」
直樹が甲高い声を立てた。目の前に聖子がいたからである。松尾と帰る途中で、何でこんな所でばったり行き会ったのか、多分先に来て待っていたのだろう、なんとなく下心があるのではと疑った。
「どうしたんだ」直樹は不審そうに聞いた。
「T商店街で、大道芸をやっているから、見に来たの」
「そういうことか」直樹は関心などなかった。「これから始まるんじゃないの。早く行った方がいいよ」
「付き合わない？」
「俺は用事がある。一人で行って来な」
すると松尾が助け舟を出した。

「直さん、そんな冷たい言い方はないよ」
「お友達なの」聖子がいい笑顔で尋ねた。
「友達というほどじゃないよ」と直樹。
「せっかくだから、二人で行けばいいのに」
松尾が聖子の肩を持った。
「やだな」直樹ははねつけながら、いいアイデアが浮かび、なかなかの名案かもしれないと悦に入った。聖子を松尾に紹介したらどうだろう。決して悪巧みではなく、案外二人はお似合いかもしれない…。
「じゃあ、三人で行こうか」
「俺がいてもいいのかい」
「松っちゃんが付き合ってくれなきゃ、面白くないよ」
「ぜひ、ご一緒しましょうよ」
聖子も乗り気である。直樹は彼らを紹介した。
「松尾君は色々なことを知っているよ。早死にした父親の影響でね。親父さんは郷土史の研究家で博識だったよ」
「何で、直さんがそんなこと知っているの」
「あんたの話から推測したよ。打ち開けた訳ではないけど、分るよ」
「おかげで貧乏してね、中学の時、新聞配達をやらされて、給料をもらって帰ったら、玄関の前でおふくろが待っていて、その金で夕食のおかずを買いに行ったことがあったね」
松尾は聞きもしないのに自分から話した。彼は正直なところがあった。ちょっとした人生の秘話である。
「私、松尾さんに共感するものがあるわ。私だって苦労して学校を出たのよ」
「井口さんは大学出のエリートなのに、少しも威張らないね、偉いよ」
「エリートじゃないわ」聖子は謙遜した。
「エリートなんかじゃないよ」直樹はけなした。
「田辺さんが強調しなくてもいいよ」
「でも、聖子さんは僕なんかとも話が出来そうだ」
「確かに松ちゃんとは、相性が合っているよ」
直樹はカップル誕生か…と呟きながら、第三者が雰囲気を壊さないように気をつかった。二人の間には暗黙のうちに発信し合っているものが感じられた。うまくいきそうだ。直樹はこの辺で退散した方がよさそうだった。
「俺、お先に失礼するよ。あんたらは大道芸を見に行ったらいいよ」
「そうするわ」
聖子が同意し、松尾もそれに従った。すでに道路の

一角に珍妙な化粧をした女芸人が、人形の紳士を抱いて姿を見せ、愛し合ったりイガミ合ったりする仕種を見せて笑わせている。直樹は一人で帰りながら、松尾と聖子が結ばれたらユニークなカップルかもしれないと好奇心を覚えた。翌週の月曜日の朝、顔を合わせると、真っ先に松尾が報告した。

「はっきり言って、ビンビン来たね」

逆説を言っているわけではなく、大真面目である。聖子と松尾は総体的に言って偏差値は似たようのものである。松尾は工業高校卒だけれども、明るい心の持主で男ぶりは悪くないから、うまくいくかもしれない。

「気に入ったら、これからも付き合えばいい」

「本当にいいの。聖子さんも本気だよ」

「大いに結構だよ」

「真剣に付き合ってみるよ」

二人とも恋愛や結婚を夢見ていて、聖子といい、松尾といい千載一遇のチャンスかもしれない。

「嬉しいね、恩に着るよ」松尾はいい表情をした。

「応援するから」と直樹。

「頼みますよ」

「楽しそうなカップルだな」

「自分でもそう思うな」

「そうだろう」

しかし、直樹は吹き出しそうになるのをこらえた。松尾は俳優並みの色男に見え、本人も心理的に役者みたいな気分になっているからだ。もともと上っ調子で載せられやすい要素があり、地に足がついていないと言った雰囲気が感じられた。

退院して自宅療養している瀬田みどりからメールが来て、体調がほぼ元通りになったとあり、その中に、「聖子ちゃんは恋人が出来たと張り切っています」という文言が添えてあった。恋人達が誕生して半月が過ぎているが、順調に行っているようである。下手に聞かない方がいいので黙って見守っていた。松尾も自分から話そうとはしなかった。しかし饒舌家の松尾がいつまでも口をつぐんでいると、気になった。それに何よりは聖子がどうなったか、知りたかった。彼は抜きがたい好奇心を抱いているのだが、それは上品とは言えない。三時休みの時、メープルケーキを買って来て彼にも奢って話しかけた。

「うまく行っているのかい」

「あの女、理屈っぽいね」不満そうな返事が返ってきたから意外だった。

「そういう一面はあるな」

「それに、よく見るとひどいツラをしているよ」
持て余すような口吻である。
「でもキスくらいしたろう」
「いや、していない。口が臭いんだよ」
「どんな女だって、口臭のする時ってあるものだ」
「あの女は特にひどいな。この間なんか、臭い息を吐きながら、私は結婚相手に処女を捧げるつもりよ、なんて抜かしたよ」
直樹は思わず笑いそうになった。そして彼らの関係は完全に破綻していることを知った。聖子はやっぱり処女だったのだな…容姿が整っていても処女は決して珍しくない。聖子の場合、積極的なのに抱いてくれる男が現れないに違いない。どうしても男をその気にさせないのだろう。
「いつだったか、俺んちに連れて行ったらさ…おふくろが苦々しい顔つきをした。聖子を一目見ただけで難色を示し、ああいう女性だったら猫か犬を飼った方がいい、もっとも魔除けになるかもしれないけどと悪口をはたいた。そんな風に言われると急激に熱も冷めてしまったね」
最初は新鮮だったが、どうやら化粧や服装や話術に幻惑されていただけらしい。
「だったら、遊びで抱けばいいだろう」
「まあね。彼女にもそういう雰囲気はあったけどね」
「聖子だって、割り切れるはずだ」
「だけど、あんなに、やりたいと思っていたのに、本人を前にすると、萎えてしまうんだ」
男と言うものは、欲望のためなら年齢や美醜を問わないものだが、例外はあるのだろう。聖子は積極的で焦っているほどだったが、松尾は逃げ腰になるばかりだったらしい。
年末年始はどこにも行かずにアパートで過ごした。聖子から電話があり暇つぶしに松尾の話をした。
「松尾君とは成立しなかったね」
「彼、私を拒んだけど、レベル低いわ」
「知能は君の方が上だよ」
「お母さんが変な人なのよ」聖子は憎々しげに言う。
「苦労しているからだろう」
「私も松尾さんなんて、好きじゃなくなったわ。また別の出会いがあるかも」
「そうだよ。そう思っていればいいよ」
「ところで、みどりさんがよろしくって言っていたわ」
「そのうち、こっちから連絡するよ」
すると聖子は、みどりさんは決まった人がいていい

わね、と羨ましそうな言い方をした。えっ、いるのかい…直樹はびっくりした声を立てた。いささかショックを受けた。
「いやに悔しがるわね」
「何となくね」
「好きなの」
「変な意味じゃなくて好きだよ」
相手は妻子のいる男性らしい。どういう男性であれ、彼氏がいるとは予想もしなかった。みどりは実のある人生を過ごしているのだ。それはみどりらしい。
「私は一人ぼっちだわ」
聖子が言う、が、ひがんでも始まらない、毅然として生きて行くべきだと言い聞かせた。
ところで、会社では妙な噂が囁かれていた。目下不渡り手形を出さないように画策しているというのだ。直樹と松尾はこうなったら危ないな、次の仕事先を考えなければならないから不安だった。しばらくして聖子にも話したら、その程度の会社はどこにでもあるわよと言った。
「でも、今のところは慣れているからな」
「次の会社も慣れればいいのよ」
人間関係は厄介だよ…と言うと、どこだって慣れるよと強調した。一週間ほどしてまた聖子から電話がかかってきた。最近、門前仲町に素敵な居酒屋を見つけたから、飲みに行かないかと誘ってきた。直樹は鬱屈していたからＯＫした。四日後の金曜日の夕方、まだ時間は早いが、門前仲町駅前で待っていた。とにかく今夜は酒を飲んで酔いたかった。聖子も早めに現れ、お目当ての飲屋に向かった。入口に赤い実のついたクリスマスホーリーの鉢植えが飾ってあった。カウンターに座って二人とも酎ハイを頼み、料理は聖子に任せ、最初に煮込みをオーダーして、まずグイと飲んだ。直樹は顔をほころばせながら言う。
「五臓六府に染みわたるよ」
「おいしいわね」聖子も表情を和らげた。「断っておくけど、私が誘ったから、お勘定は持つわ。その代り、もし酔ったら月島まで送ってくれる」
「送ってやるけど、飲み代は男が払うものだ。心配するなよ」
「私に持たせて。心ゆくまで飲んで」
「いいんだよ」
「ダメよ」
そんなやり取りをして、酎ハイをお代わりして飲み、かつ食べて喋った。焼き鳥、アナゴ、メカブなどがお

いしく、次々と口に運んだ。酔うごとに話すことは筋が通らず、あちこちに飛び、そのうち二人とも酔ってきた。
「聖子は大学で勉強したというけど、何を専攻したの」
「日本文学なの、易しいから」
「へえ、何か役に立ったかい」
「思いがけない小説家を見つけたの。田中英光という作家、知っている？」
「名前は聞いたことあるな」
「大抵の人は知らないの」
「こう見えても図書館に勤めていたからな」
「英光は共産党に入ったり、愛人を包丁で殺しかけたり、酒ばかり飲んだり、最後にアドルム中毒になって自殺しちゃったの」
「そんな生き方がいいのか」
「私、世の中から外れた人が好きなの」
「どうしてだね」
「何となく肌が合うような気がするの」
「分らない訳じゃない」
「どう解釈されてもいいけど」
「普通の男から愛される自信がないんだろう」
「じゃあ、あんたを口説いて、亭主にしてやろうか」
「俺はいいよ。逃げるよ」
「腰抜けめ！そこらの美人をひっかけて結婚すればいいさ」
「君はダメ男を見つければいいさ」
「ダメ男はともかく、私はちゃんと結婚して子供を産むの。そうしないと、いつまでも処女に思われるのがイヤなの」
「そういうこと、気にしているんだなあ」
「私だって、人並みの女よ」
「人並みか…」
　直樹は笑った。二時間近くいてお開きにし、そして聖子が強引に金を払った。歩いていると面倒臭くなってタクシーを拾った。聖子はいびきをかいていたが、家の近くに来ると直樹は見当をつけて起こした。
「ここで止めてください」
　運転手に告げた。聖子が降りると、直樹が「じゃあな」と手を上げたら、コーヒーを飲んで行ってと勧めた。
「俺はこのまま帰るよ」
「いいから降りなさい」
「眠いんだ」
「ちょっとだけよ」

「帰るよ」
運転手が後ろを振り向いて、
「お客さん、せっかくだから、付き合って上げなさい」
余計なことを言った。彼は他人の手前、気恥ずかしくなり、降りざるを得なかった。タクシー代は聖子が払った。古めかしい八階建てのマンションに案内され、エレベーターで四階に上った。居間に通され、ソファに座って背中を持たせかけた。目の前のテーブルには淡いピンクの花が差してあった。書棚には田中英光全集十一冊が並んでおり、その一冊目を引っ張り出した。
直樹は『オリンポスの果実』を拾い読みし、聖子の話を思い出した。主人公はボートの選手として戦前のオリンピックに出場し、予選で敗退したーーメダルを取ったわけではないが、それでも格好よかった。女の選手に片思いしただけの恋もいい。直樹は挫折の多い青春に心を打たれた。むろん、オリンピックに出ただけでも凄いと称賛した。酒の後のコーヒーは格別な味がした。
主人公の恋した女は綺麗だっただろうなと空想しながら、自分もそんな恋をしてみたいと思った。そして聖子を見ながら言った。
「君と寝るために来たんじゃないからな」直樹は断った。
「私だって、そのために誘ったんじゃないわ」
「しかし、片思いもいいな」直樹はさっきの話題に戻した。
「だったら、誰かに片思いをすればいいじゃないの」
直樹はそのまま眠ってしまった。どれくらい眠ったのか、気がつくとカーテンの隙間から朝日が差していた。昨夜は薄々聖子に寝かされたのを思い出した。横には聖子がしおらしく眠っている。彼は毛布をそっとまくり、パジャマごとパンツをずらして秘所を見た。艶のある黒々とした陰毛がタワシのように見え、たっぷり肉のついた大腿部と意外にすらりとした脚がそそった。しげしげと眺めてから手で触れたら少し濡れていた。しかし挿入する気は起らなかった。
着替えをしてから窓を開け、公園の綺麗な緑を眺めながら欠伸をした。その間聖子も起き上がって身支度をしている。
「お邪魔したな」
「朝御飯をつくるから、食べて行って」
「いいよ、家で牛乳とパンですますから」
彼は一刻も早く帰ってもう一度眠りたかったが聖子はしきりに直樹を引き留めた。率直に言って抱かれた

がっていた。が、直樹は聖子に関心はなかった。
「女の体を見て、その気にならないの」
「ならないね。なんだ、起きていたのか」
「あなたなら、抱かれてもいいわ」
「勘弁してくれ」
帰ろうとしたら、後ろからベルトをつかんで放そうとしなかった。直樹はますます聖子に嫌悪感を覚え腹が立ってきた。
「おい、放せよ」
「放さないわ、もっと一緒にいたいわ」
「別の男を見つけろよ」
気の強い聖子だが泣き出しそうになった。結局、直樹は聖子の家から逃げ出してきた。家に帰り、ホッとした。明日は、会社は休みだから腹ごしらえをしてから眠った。
月曜日、出勤したら仕事の前に松尾が話しかけて来た。
「直さん、会社が不渡りを出すことなんて、あるかね」
「まず、ないだろう」
「でも、皆盛んに噂をしているぜ」
「噂だけだよ」
「そうかなあ」
すると彼は理屈をこねだした。世の中は一見して穏やかそうだが、実際は行き詰っていて、いつか地殻変動を起こして日本はグシャリと潰れてしまうというのだった。
金に抜け目のない松尾は株で儲ける会に入っていて、四百万円を投資しているのだが、このところ連絡してこなくなったので心配している。
「売った方がいいんじゃないかな」直樹は知りもしないくせに口を出した。
「電話をしたら業者は今、売るわけにはいかない」と言うのだそうだ。
「それじゃ、どうするの」
「しばらく様子を見るよ」
二人でそんな話をしてもらちが明かなかった。
日々が何事もなく過ぎていく。会社こそ倒産しなかったが、直樹は会社を移り、松尾とは交流も立ち消えになった。
直樹は職場を変えたが相変わらずフォークマンの仕事をしている。それしか能がなかった。彼にはオリンピック選手のような能力もなく、それどころか何もないから人から尊敬されないので侘しくなった。

そうこうしているうちに十九年が過ぎた。三部屋ある老朽マンションに内縁の妻と二人暮らしをしている。二人とも五十代の半ばになった。カツカツの生活をしている上に、人員整理で解雇された。日雇い同然の勤めだから失業保険など貰える身分ではなかった。毎日、面接であちこち出掛けたが、家の近くには適当なところは見つからなかった。彼は酒以外に何の楽しみもないので飲むしかなかった。

秋風が吹いて寒い日が続いている。面接から帰ると、妻のつたえが、

「さっき、吉村久夫さんという人から電話があったよ」と教えてくれた。

「あゝ、印刷屋で一緒だったやつだよ、何か言っていたか」

「何も話さなかったわ」

「じゃあ、後でかけるよ」

夕食を食べてから電話した。吉村は小さな会社の部長をしている。あんな奴でも部長だから感心させられる。彼はそつのない平凡な男だ。適当に女とも遊んでいるらしい。色男ではないが少しはもてた。直樹は近況を話してから仕事はないかと聞いたら、「心がけておくよ」簡単にあしらわれた。

「聖子は元気でやっているかね」直樹が尋ねた。

「同棲しているよ」

「へえ、ほんとか。物好きがいて、よかったね」

「だって、相手は犬だからな」

「何、犬と同棲しているだって？　じょ、冗談だろう」

「本当だ」

「ボルゾイのオスでね、噂によると、ぞっこん惚れ込んでいて、セックスもしているらしいね」

「たまげたな。でも、聖子らしいな」

ボルゾイはロシア犬だが、元々狩猟犬で俊敏なハンターである。外国の犬だから、日本人の女の美醜は見抜けないだろう。

「聖子はいい犬を手に入れたわけだね」直樹は言った。

「聖子には勿体ないくらいだ」

「しかし聖子が犬に抱かれて快感を味わっているなんて不気味だね」

「でも、そういうのを見たら楽しいね」

「ああ、楽しいだろうな」

直樹は薄く笑った。

初稿、みなせ「愚かしい災難」77号、2018年2月